

形容詞の意味と統語形 (2)*

八 木 克 正**

4.4 記述形容詞の下位区分

4.4.1 不完全 (INCOMPLETE) と完全 (COMPLETE)

次の(41)と(42)の文を比較してみよう。

- (41) a. John is *slow* to react.
 b. John is *anxious* about your health.
 (42) a. Mary is *beautiful* (to look at).
 b. The box is *heavy* (to lift).
 c. The coffee is *hot* (to drink).

(41)(42)の文はいずれも主語について記述しているが、(41)で使われた不定詞と(42)で使われた不定詞は、それぞれ意味的に違った役割を果たしている。人が *slow* であるということは、後に述べる、人の「精神的な活動の弱さ」をいう場合を除いては、a *slow eater*, a *slow learner*, a *slow runner* というように、その人のさまざまな側面を記述することができる。*anxious* についてもさまざまなことに気をもむことがある。

これに対して、人が *beautiful* である、あるものが *heavy* である、ものが *hot* であるといった場合、記述としてはそれで完成していると考えられる。そして、一般的には(41)の () で示した不定詞の部分は、実際に使われる可能性は極めて低い。⁴⁾ しかも、4.4.2で述べるように、*to* 不定詞が使われている場合とそうでない場合とでは形容詞の意味が異なる可以考虑することができる。

いずれにしろ、(41)の形容詞は主語について記述しているが、形容詞だけでは記述が不完全であり、補足的な *to* 不定詞あるいは前置詞句をとまって始めて完全な記述となる。(42)の形容詞は不定詞をとまわずとも意味的には主語について記

述が完成していると考えられることができる。

このように、*slow*, *anxious* は不完全 (INCOMPLETE) 記述、*beautiful*, *comfortable* などは完全 (COMPLETE) 記述といえることができる。

4.4.2 完全記述形容詞の一時性 (TEMPORAL) と非一時性 (ATEMPORAL)

主語について記述する形容詞のうち、完全記述形容詞には、(41)のように *to* 不定詞を補って意味を明確にすることを許すと考えられているものと、そうでないもの (定義上この *to* 不定詞を付加できない形容詞は本章で扱う範囲外であるが)、あるいは *to* 不定詞を付加すると形容詞の意味が変化するものがある。(42)の *beautiful*, *hot* の例は安井ほか (1976: 243 ff.) などによっているが、実際には *beautiful*, *cold*, *delicious*, *fragrant*, *good* (おいしい)、*heavy*, *hot*, *light* (軽い)、*old*, *precious*, *pretty*, *ripe*, *soft*, *sour*, *sweet*, *tasty*, *tender*, *ugly*, *young* など (これらの形容詞を *beautiful-type* という) は、本来の意味では非一時的 (ATEMPORAL)、つまり特定の行為を行った時だけの性質を意味するのではない。したがって普通は *to* 不定詞をとることはないが、どのような時に *beautiful* であるかあるいは *heavy* であるかということを示す時には、*to* 不定詞をとることがあると考えられる。その時には、非一時的な意味が一時的な意味、すなわち「判断」の意味に変化したと考えることができる。しかし一般的には口語的で、スピーチレベルが下がる。⁵⁾

- (43) a. The stone is *heavy*.
 b. ? The stone is *heavy* to lift.

*キーワード：叙述形容詞の分類；形容詞の意味；形容詞のバタン

**関西学院大学社会学部教授

4) 安井ほか (1976: 237) 参照。

5) 安井ほか (1976: 244) 参照。

- (44) a. Those shrimps are *tender*.
 b. ?Those shrimps are *tender to chew*.
 good は、to 不定詞をとる時ととらない時とでは意味が異なる。

- (45) a. This water is *good*.
 b. This water is *good to drink*.
 (45a) は「おいしい」であるが (45b) は「飲める；飲んでも害はない」の意味である。(45b) の good は不完全記述の形容詞である。

次は安井ほか (1976 : 245) の例である。

- (46) a. *Coal is *black to look at*.
 b. *This ball is *round to throw*.
 c. *This room is *rectangular to live in*.
 これらの文が述べようとしている状況は想像しにくいだが、black, round, rectangular などといった永続的な (PERMANENT) 意味をもった形容詞は to 不定詞をとることはできない。したがって、定義上本章で扱う形容詞とは種類が異なる。一般に、叙述形容詞に後続する to 不定詞は、主語の性質が現れる場合を明示する。したがって、PERMANENT な意味標識をもったものは to 不定詞を後続させることはない。beautiful, heavy, delicious などの形容詞は本稿で ATEMPORAL と言っているように、PERMANENT とは性質が異なる。普通に to 不定詞を従えることはなくとも、ある種の条件が整えば to 不定詞を従えることがあることから、この ATEMPORAL という意味標識を使うのである。

4.4.3 非一時性から一時性への転換

それではどのような条件があれば、beautiful-type が一時的な意味をもち、to 不定詞を従えることがあるのだろうか。BOE の中で beautiful が to 不定詞を従えているのは、次の3例である。

- (47) a. This is a glamorous, amusing and also thought-provoking book, *beautiful to look at and entertaining to read*.
 (見た目にきれいだ)
 b. *Beautiful to possess and superb to wear, delectable lingerie is only successful when it fits correctly*.
 (持っていてきれいだ)
 c. This one is *beautiful enough to be the bride*.
 (花嫁になるのに十分きれいだ)

(47a) は *entertaining to read* と、(47b) は *superb to wear* との対比で使われている。また、(47c) は *enough* を使うことによって beautiful である場合を限定している。また、too... を使うことによって、性質があてはまる場合を限定することが可能である。

- (48) a. This stone is *too heavy to lift*.
 b. The boy is *too young to drive*.
 c. The grapefruit is *too sour to eat*.

このように、too... と enough は ATEMPORAL な性質をもった形容詞を TEMPORAL な性質に変化させる働きをする。⁶⁾TEMPORAL な性

- 6) too ... for ... to の関連語句が使われると、
 (i) a. This book is *too difficult for us to read* (it).
 b. The stone is *too heavy for me to lift* (it).

のような例について、柏野 (1993 : 155 f.) のように文主語と同一の to 不定詞の目的語は省略されずに残ることができるという主張と、好田 (1986) のように、it を残した文は普通ではないという主張がある。いずれもインフォーマント調査の結果をあげているが、好田氏の調査では、(i b) は29人のインフォーマントのうち容認する人はひとりもないという。柏野氏は、Bolinger 博士を含め数人が (i a, b) を容認するという。この問題は言語資料をどう解釈するかという極めて難しい問題を含んでいるが、ここで少し詳しくみておく。

判断の形容詞の一種である *dangerous-type* とそのサブ・タイプである *tough-type* (以後、この注では *dangerous-type* と総称する)、それに記述の形容詞である *beautiful-type* は、よく too ... for ... to の関連語句で使われる。(ia) の difficult は *dangerous-type* であり、(i b) の heavy は *beautiful-type* である。too ... for ... to 構文の to 不定詞の目的語である代名詞が文主語と同一指示の場合に、それを残すことができるかどうかということ論じる時、形容詞の本質的な違いをみていないという問題がある。判断の形容詞と記述の形容詞では、to 不定詞の目的語になった代名詞を残すことができるかどうかは同じ問題ではない。そこで、これら2種類の形容詞にどのような統語的な違いがあるかを改めてみておく。

第一に、すでに述べたように、*dangerous-type* は NP is Adj. to do のパターンをとるが、*beautiful-type* は主語についての記述が完成しているために、普通はこのパターンをとらない。だが、too ... (for ...) to の関連句をことはできる。

- (ii) a. John is *difficult* (for us) to please.

質をもつと、完全記述の形容詞ではなくなり、判断の形容詞に変化する。(47)(48)の形容詞はすべて判断の意味をもつと考えることができる。BNCの検索では、*It's beautiful to go out in the morning and see the world waking up.* (朝に出かけて世間が目を覚ますのを見るのはきれいだ)の例がある。*beautiful*が*wonderful*の意味に近く、TEMPORALな意味に転化している。しかしまだこの用法は一般化しているとは思われない。

4.4.4 補部の型：状態 (MENTAL STATE) と様態 (MANNER)

次の2つの文を比較してみよう。

(49) a. *John is slow to react.*

b. *John is anxious about your health.*

*slow*も*anxious*も人について記述しているが、*slow*は行動の様態を述べているのに対して、*anxious*は精神状態を表している。このように、記述をする形容詞のうちto不定詞をとるものは一般的に様態を述べるのに対して、前置詞をとる場

b. *John is too difficult (for us) to please.*

(iii) a. **The river is wide (for us) to swim across.*

b. *The river is too wide (for us) to swim across.*

ということは、*too ... (for ...) to*の相関語句は、*wide*といった形容詞で完成している記述を「to不定詞が表す状況では...」というように、主語についての記述を相対化する働きをしている。

第二に、*beautiful-type*は*it is Adj. (for ...) to do*のパタンをとれないが、*dangerous-type*と*tough-type*はとることができる。

(iv) a. *It is difficult for us to please John.*

b. **It is wide for us to swim across the river.*

ということは、繰り上げ変形を認めるかどうかにかかわらず、*dangerous-type*では、(iva)のto不定詞の目的語が(iii a)の文主語になっている関係であるが、*beautiful-type*では(iv b)が容認されない文であるから、そのような関係がそもそも成り立たない。

第三に、*beautiful-type*では*too ... for ... to*の部分を受動形にすることができるが、*dangerous-type*は受動形にすることができない。

(v) a. *The book is too difficult for us to read.*

b. **The book is too difficult to be read.*

(vi) a. *The stone is too heavy for us to carry away.*

b. *The stone is too heavy to be carried away.*

受動形にするためには、主語、動詞、目的語がそろっていることが必要である。だからこそ、単に*too ... to*の構文になった時ではなく*too ... for ... to*になった時、すなわち不定詞の意味上の主語が明示された時にto不定詞の目的語が残るかどうかが問題になるのである。そう考えれば、(via)は受動形(vib)が可能であることで明らかなように、本来的に[*for us to carry it away*]という構造、言い換えれば[*we carry it away*]のように主語、動詞、目的語のすべてがそろった構造になっていると考えなければならない。それに対して(v a)は[*for us to read*]の形をしており、目的語が欠けているために受動形にできないと考えられる。

上にあげた統語特徴を総合的に考えると、(i b)のような*beautiful-type*の文では、本来to不定詞を付加することができない構造に、新たな命題を*too... (for ...) to*の形で付加した構造である。従って、to不定詞の目的語がそこに存在していなければならない。だから*too... for... to*の受動形が可能になるのである。それに対して(i a)のような*dangerous-type*の文では、to不定詞がもともと必要な構文であり、そのto不定詞の目的語が文主語になっているから、to不定詞の目的語はもはやその位置には存在しない。従って*too... for... to*が受動形になることができないのである。

to不定詞をとるかたらないかということ、対応する*it is Adj. to do*のパタンがあるかどうかということが、*dangerous-type*と*beautiful-type*の大きな違いである。そして、その違いが、to不定詞の目的語を残しておくことができるかという問題と*too... for... to do*が受動形にできるかという、実は同じ問題の背後にあるのである。

それではなぜ*beautiful-type*が*too ... for ... to do*の形で使われた時に、不定詞の目的語が現れないことがあるのだろうか。これは*dangerous-type*がとるパタンと表面的に同じNP is too Adj. for ... to doの形になるために、itが存在しない*dangerous-type*とitが存在する*beautiful-type*が融合して区別がつかなくなった結果であると考えることができる。

- 7) 感情の意味の形容詞がとる前置詞には、*by, with, at, about, of, to, for, over*があつて、これらの前置詞はそれぞれ特別な意味をもつ。したがって、どのような感情形容詞とどの前置詞が結合するかはおのずと決まる。また複数の前置詞と結合する感情形容詞は、結合した前置詞によって異なった意味をもっている。Osmond (1997)は、このような事実を検証したものである。

合は主語の精神的な一時的状態を表す。⁷⁾それぞれの形容詞をあげる。

slow-type: prompt, quick, slow.

anxious-type: afraid, amorous, aware, boastful, capable, envious, expectant, explanatory, fearful, fond, forgetful, heedful, hopeless, oblivious, patient, repentant, resentful, scornful, sensible, shy, skeptical, stingy, wasteful, etc.

slow-type の中で *slow*, *quick* は *to* 不定詞の代わりに (50b) のように *in doing* をとることがある。まず *slow* について述べる。⁸⁾

(50) a. John was *slow* to react.

b. John was *slow* in reacting.

doing をとっている場合と *to* 不定詞をとっている場合とでは *slow* の意味が異なる。*to* 不定詞をとっている場合の *slow* は行動の様態 (すなわち「ゆっくりと」) を述べていることは上述したが、*in doing* をとっている場合は、人について述べる時 “not very clever and do not understand or notice things quickly” (頭の働きが鈍い) という精神的な状態をいう完全記述の意味である。事柄についていう場合は「時間がかかる」の意味で、これも完全記述である。*in doing* は、何に関して述べているのかを表すための付加詞 (*adjunct*) であり、*in* の目的語に名詞をとることもある。名詞の *slowness* には「精神的な状態」を表す意味がないから **his slowness in reacting...* といった表現がないのである。⁹⁾

quick についても同様で、ごく普通に使われる意味では *to* 不定詞を要しない完全記述で「行動がすばやい」の意味であるが、*to* 不定詞をとる場合は「迷わず...する」の意味である。

(51) Mark says the ideas are Katie's own, and *quick* to praise her talent. [COB²]

(マークはそのアイディアはケイティーのもので、すぐ彼女の才能のほめ言葉を続けた)
in をとる場合は、完全記述の意味と同様であるが、今では使われることはまれである。辞書の中では、BBC が次の例をあげている。

(52) She was precise and *quick* in her movements....

OED² の検索では *quick* が *in* をとった最も新しい例をあげる。

(53) The white child ... is not so *quick* in picking up parlour tricks.

[s.v. QUICK (1897)]

(その白人の子はお座敷手品の種がすぐにはわからなかった)

BOE には、*to* 不定詞をとった例は数多いのに比べ動名詞をとった例は3例である。その中の一例をあげる。

(54) The Times says the Bank of England was so *quick in* flashing details of the contents of the stolen briefcase to the computer screens of City dealers that the bonds may no longer be negotiable.

(タイムズ誌の報道では、英国銀行は盗難にあったブリーフケースの中身の詳細をすばやくロンドン市中のディーラーのコンピュータ・スクリーンに速報にして流したので、その債権はもはや取引の対象にはならないだろうということだ)

なお、BBI² は *swift* が *to do* をとることを認めているが、今日では *swift* 自体が古語になっている。また、OED² の検索で *to do* をとった最新の例は次の例で、今日普通に表れるボタンとは考えにくい。

(55) In his beaked galleys, *swift* to cut the sea. [s.v. CUT (1870)]

8) *long* は疑問文と否定文では *doing* を従えることがあるが、*to do* をとることはない。

(i) a. *They will be *long* (in getting there).

b. Will they be *long* (in getting there)?

c. They won't be *long* (in getting there).

ここで使われている *long* は様態の形容詞ではなく、*be long* = *take a long time* の意味で、副詞である。

9) 安井ほか (1976: 240) 参照。動詞の受動形で *be ~ed that* で同様の意味をもつことがある。

I was encouraged that small steps in the right direction could be made. [S. Pinker, *Learnability and Language Development* (1984)]

(正しい方向へ少しでも踏み出すことができたことで勇気がでた)

(舳先のとがったガリー船で、すばやく海を切って進む)

不完全記述の形容詞で前置詞句を必須要素としてとるものは「精神状態」の意味に限られるわけではない。「精神状態」というのは、もちろん人(HUMAN)を主語にとる場合を前提にしている。人以外の主語をとる場合を考えてみよう。

- (56) a. The castle is *open* to public.
[Herbst1984]
(その城は一般公開されている。cf. The castle is open. その城は開いている)
- b. The road is *liable* to flooding at high tide.
[Herbst1984]
(その道路は高潮時には冠水することが多い。cf. *The road is liable.)
- c. Wooden furniture is *appropriate* for most settings.
[Sinclair1998: 435]
(木製家具はほとんどの状況に合う)

ここで問題にしている NONHUMAN の名詞を主語にとる形容詞を「物の状態」(STATE OF THINGS) という共通の意味をもっていると考えることにする。これらの形容詞の統語的特徴は、HUMAN の名詞を主語にとる場合とは違って、動的な意味をもたせることはできないことである。通常、物は主体的に状態を変化させることがないからである。

- (57) a. *The castle got *open* to public.
b. *The road got *liable* to flooding at high tide.
c. *Wooden furniture got *appropriate* for most settings.

このように、前置詞を必須要素とする形容詞は「状態」(STATE) の意味特徴をもち、人を主語にとる MENTAL STATE の形容詞と、物を主語にとる STATE OF THINGS の形容詞に下位区分することができる。STATE OF THINGS の形容詞は *open-type* と呼ぶことにし、その形容詞をいくつかあげておく。

open-type: appropriate, eligible, full, lacking, long, remote, renowned, short, suitable, etc.

4.5 感情形容詞の下位区分—理由 (REASON) と原因 (CAUSE)

次のそれぞれのペアを考えてみよう。

- (58) a. I am *glad* that they are coming.
b. I am *glad* to meet you.
- (59) a. He was *angry* that he wasn't paid.
b. He was *angry* to hear the news.
- (58a)(59a) の *that* 節は、なぜ文主語が形容詞で表された感情をもつにいたったかを説明する理由を述べる名詞節である。¹⁰⁾ これらが名詞節であることは、*pseudo-cleft* 文を作ると前置詞が必要になることからわかる。
- (58a)(59a) は *that* 節を後続させるために前置詞が省略されたのである。
- (60) a. What I was *glad* about was that they are coming.
b. What he was *angry* about was that he wasn't paid.

また、(58a)(59a) の *that* 節は *the reason is...* で始まる文の補語の役割を果たすことから、理由を述べる名詞節であることが確認できる。

- (61) a. The reason that I was *angry* was that he insulted me yesterday.
b. The reason that I was *glad* was that I found the book I had been looking for.

一方、*to* 不定詞の方は形容詞で表された主語の感情が起こされた直接的な原因を述べている。このことは、感嘆文の容認度の相違で確認できる。*to* 不定詞を使った文の感嘆文(62)はごく普通であるのに、*that* 節を使った文の感嘆文(63)の容認度は低い。

- (62) a. How *glad* I am to meet you!
b. How *angry* he was to hear the news!
- (63) a. ?How *glad* I am that they are coming!
b. ?How *angry* he was that he wasn't paid on time!

さらに *angry*, *mad*, *excited*, *upset* といった強い感情を表す形容詞は *to* 不定詞文の時は *be* に代えて *get* の文にすることができ、*that* 節の文の時は *get* に代えると容認度が下がる。

- (64) a. He got *mad* to hear the news.
b. He got *excited* to know that the Yan-

10) *that* 節が名詞節であることについての議論は八木 (1996: 102f.) を参照。

kees won the pennant.

(65) a. ?He got *mad* that he wasn't paid on time.

b. ?He got *excited* that the Yankees won the pennant.

glad-that type の形容詞と *glad*-to type の形容詞のリストをあげる。

glad-that type: amused, angry, delighted, frightened, glad, happy, keen, pleased, proud, sad.

glad-to type: amused, angry, annoyed, astonished, astounded, delighted, disgusted, embarrassed, frightened, glad, happy, impatient, excited, sad, shocked, thrilled.

5 形容詞の分類

以上述べてきたことをもとに、一覧表にしてみよう。記述用法の形容詞は、表 (p. 207) のように3段階の意味標識の階層をなしている。それぞれの意味標

識の右にしめしたのがパターンで、右端の数字は下の用例の番号に対応する。

上の表にあてはまる用例をあげる。右端の数字付きの記号はパタンの下位区分(サブパターン)を表している。

(i) It is *apparent* that John likes Mary. [A1]

(ii) It is *important* that you be present at the meeting. [A2]

(iii) I am *sure* he is sick. [B1]

(iv) I'm *afraid* that it will rain. [B2]

(v) I'm *uncertain* if he will come. [F]

(vi) John is *sure* to come. [D1]

(vii) It is *dangerous* for John to swim across the river. [C1]

(viii) It is *silly* of him to believe her. [C2]

(ix) John is *easy* to convince. [D2]

(x) John is *silly* to do such a thing. [D3]

(xi) John is *slow* to react. [D4]

(xii) She is *anxious* about her health. [E1]

(xiii) The castle is *open* to public. [E2]

(xiv) Mary is *beautiful* (to look at). [D5]

(xv) I'm *glad* that they are coming. [B3]

(xvi) I'm *glad* to meet you. [D6]

6 パタンどうしの関係付け

ひとつの形容詞がいくつかのパタンで使われる。パタンどうしをどう関係づけるかはやはり考える必要がある。本書では2つあるいはそれ以上のパタンを変形によって関係づけるという考え方はとらない。それぞれのパタンで使われた形容詞は別の意味特徴をもっているからそのパタンで使われたと考えるべきだと思う。

nice は特に多くのパタンで使われる。例文とパタンの名称を与える。

(66) a. You are *nice* to come home to. (D2)

b. You are *nice* to invite me. (D4)

c. It is *nice* to come home to you. (C1)

d. It is *nice* of you to invite me. (C2)

e. It is *nice* that you're staying here after all. (A1)

したがって、記述の用法の *nice* は5つの意味をもっていると考える。

しかしながら、パタン間関係はとらえておく必要がある。ただ、(64)の場合は、主語が重い (*heavy*) 場合、仮の主語 *it* をとって本当の主語は後置するという機械的な操作であるから、このような操作は統語的に認める必要がある。

(67) a. It is *inconvenient* (for me) to meet you at 2:00.

b. (For me) To meet you at 2:00 is *inconvenient*.

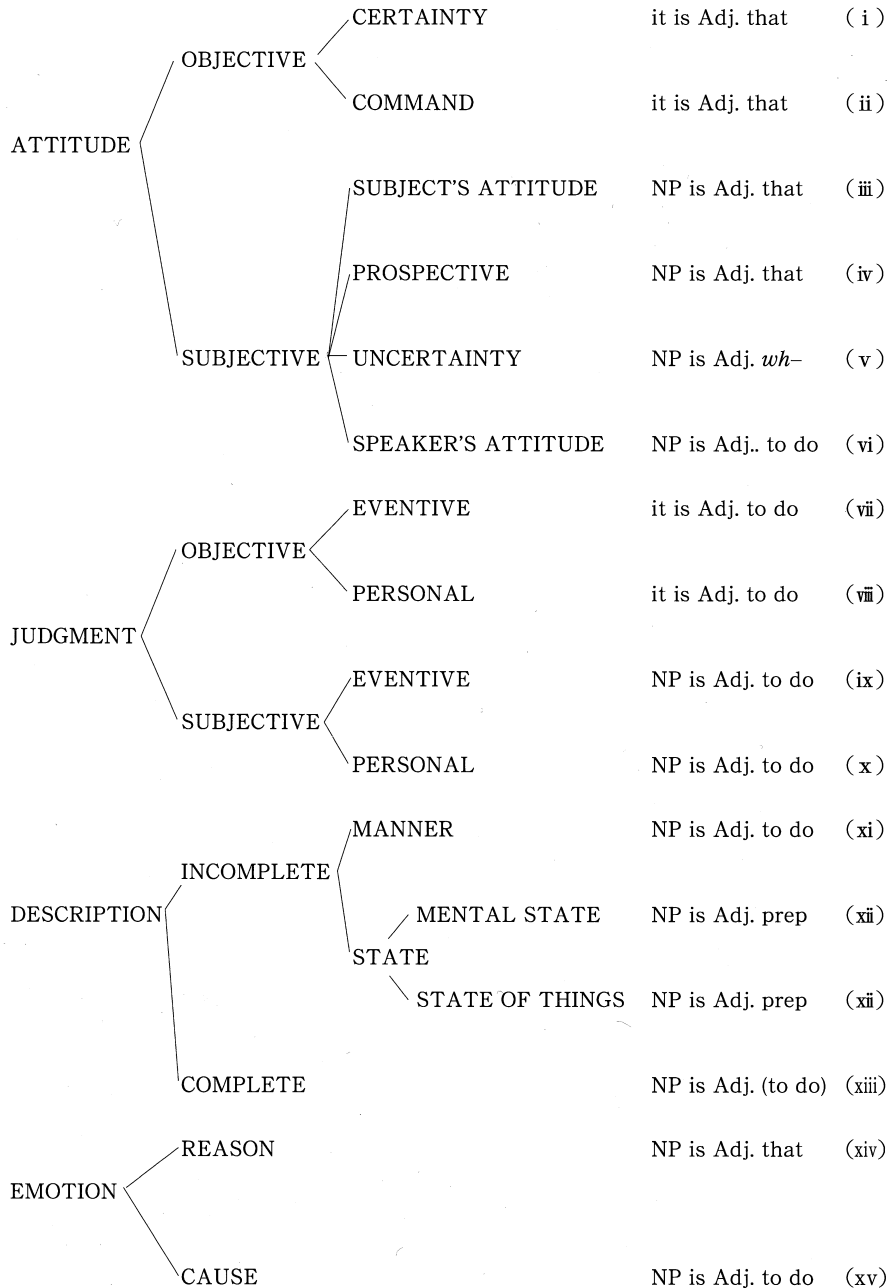
6.1 C1とD2 ; A1とD1

(68)(69)については生成文法でさかんに論じられたことがある。Chomsky (1964)、Postal (1971)、Berman (1973)、Halpern (1979)などが代表的であるが、それぞれ(a)の *to* 不定詞の目的語、あるいは *that* 節の主語を上位の文に繰り上げる、繰り上げ変形 (*raising*) で説明されてきた。

(68) a. It is *easy* to deceive John. (C1)

b. John is *easy* to deceive. (D2)

(69) a. It is *likely* that the weather will be sunny. (A1)



b. The weather is *likely* to be sunny. (D1)
dangerous-type のうち難易の意味をもつものだけが C1 と D2 の両方の意味と用法をもつ。

likely が⁽⁶⁹⁾のような繰り上げを許すのに、意味の類似した *probable*, *possible* がこのような繰り上げを許さないということが、認知言語学のような意味を出発点に考える立場に対する批判として使われてきた。

(70) a. It is *probable* that he will be late.

b. *He is *probable* to be late.

(71) a. It is *possible* that we will be able to attend. [BBI]

b. *We are *possible* to (be able to) attend.

本書では、そもそも繰り上げというような変形操作は認めないのであるから、*likely* と *probable*, *possible* が違ったパターンをとるといふことには何

ら問題は生じない。likely と probable, possible とでは意味が違う。

possible について、(72a) は可能であるが、to 不定詞の目的語を繰り上げた (72b) が容認されないということがある。だが、否定の意味をもった (70c) は容認される。これは繰り上げという操作そのものに問題があることの証拠のひとつになる。

(72) a. It is possible to solve the question.

(C1)

b. *The question is possible to solve.

c. The question is not / barely / hardly possible to solve. (D2)

possible には (72a) の型をとる「出来事についての客観的判断」の意味はあるが、(72b) の型をとる時は「態度」形容詞であり、「主観的判断」を表す形容詞ではなくなる。しかし、否定形をとると「判断」の意味をもつから D2 のパターンが可能である。また、possible は D5 の型をとる「完全記述」の意味がある。主語が「存在すること」「起こりうること」「行われうること」の意味になるときにこの型をとることが可能になる。

(73) a. Several solutions are possible (to exist). (D5)

b. Accidents are always possible (to happen) in this kind of situation. (D5)

c. Modification is possible (to be done). (D5)

Yasui (1998) は Akatsuka (1979) をもとに、impossible が it is Adj to do の構造をとることができるのに、なぜ possible はこの構造をとることができないのかを説明している。要点は、impossible は「論理的で客観的」な読みと、「感情的で主観的」な「読み」（本稿では「意味」といっている）をもつ。それは impossible を使った(74)の文に (75a) も (75b) も続けることができることで明らかになる。

(74) It has been impossible to live with Tony.

(75) a. He has been in prison for the past five years, you know.

b. He is indeed an eccentric man.

これに対して、possible は「論理的で客観的」な

読みしかもたない。一方、it is Adj. to という構造は、論理的で客観的な意味の表現にも使われるし、主観的な意味にも使うことができるのに対して、N is Adj. to do は主観的な意味にしか使うことができない。したがって論理的可能性の意味しかもたない possible は、主観的な意味表現にしか使わない N is Adj. to do の構造で使うことはできないということになる。さらに、possible が否定的な文脈では N is Adj. to do の構造をとることができるのは、否定文は一般的に肯定命題の存在を前提としており、それを否定するということは、その肯定命題に対して主観的な判断を下すということになるから、主観的な意味を表現する構造である N is Adj. to do とることができる。

この主張は、possible と impossible のもつ意味が異なること、それが統語形式の選択に反映していること、さらに構造がそれぞれ表す意味をもつという前提に立つことについては筆者の考えとまったく同じである。ただ、it is Adj. to do という構造が主観的な意味をも表すという主張だけが筆者の考えと異なる。この点についての筆者の考えを明らかにしておく。

そもそも impossible が2つの意味をもつことはよく知られている。生成文法の中でも Lasnik & Fiengo (1974) が構造との関連で論じている。¹¹⁾ その2つの意味とは「能力」と「可能性」である。「能力」の意味では it is impossible (for ...) to do の構造をとり、「可能性」の意味では it is impossible (for ...) to do の構造も it is impossible that の構造もとることができる。すなわち it is impossible to do は「可能性」の意味にも「能力」の意味にも使われる。(75a) について言うと、一緒に住むことができないのは物理的理由によるわけであるから impossible は「可能性」の意味であり、(75b) ではトニーは変人だから、いわば自分には一緒に住むだけの能力がないという意味である。すなわち、impossible と it is Adj. to do が感情的な意味と論理的な意味の両方を表すかそうでないかという問題ではなく、もっと基本的なところでの impossible の意味のあいまいさが(74)に (75a) (75b) の性質の違った文を後続させることができる理由であると思う。

11) この Lasnik & Fiengo (1974) の主張の概略とそれについての批判は八木 (1987: 39 ff.) を参照。

probable は、古い英語では D1 のパターンをとることができた。これは Burchfield (1996, s.v. PROBABLE) に言及がある。OED²から例をあげる。

- (76) These rustick and rash undertakers .. are only *probable* to ship-wrack themselves.

[s.v. PROBABLE (1653)]

古くは **probable** は **lilely** と同義であったから(73)が可能であった。今日では **probable** の意味は **likely** と「類似」ではなく、“**likely to happen**” と同義とすべきもので、それは次のような例で明らかである。

- (77) a. An election in June seems increasingly *probable*. [CIDE]

- b. A victory doesn't seem very *probable* at this stage. [LDCE³]

仮主語の **it** をとらず事柄を主語にとる場合は、**probable** は完全記述の意味になる。すなわち **probable** は CI と D1 の場合では異なった意味で使われるのである。

6.2 C2とD3

判断の形容詞のうち、個人に関する客観的な判断を表す **it is Adj. of NP to do** のタイプと、話し手の主観的な判断を表す **NP is Adj. to do** を Rosenbaum (1967)、Bresnan (1971)、安井ほか (1976: 228 ff.) などのように変形で関連づけるというのは問題がある。次のデータを見てみよう。

- (78) a. You are *silly* to make such a mistake.
b. It is *silly* of you to make such a mistake.
- (79) a. It is *queer* of you to be speaking of the heat in January.
b. ? *You are *queer* to be speaking of the heat in January.
- (80) a. It was rather *rash* of you to agree to lend them your car.
b. ? *You were *rash* to agree to lend them your car.
- (81) a. It was *inconsiderate* of you to say that.
b. ? *You were *inconsiderate* to say that.

このように C2 と D3 は予想以上に対応関係が

少ない。これは、ここで使われた形容詞が人を評価する意味をもっていることに原因があると考えられる。客観的な判断をよそおう **it is ... of...** の表現は使っても、主観的に人を主語にする名指しの形を避ける意図が働いていると考えることができる。

kind についても同様で、人についての判断は仮にほめことばであっても、相手に対する評価を述べる時には **you are kind to do...** といった表現は避ける傾向があるのはすでに 4.3.1 で見た通りである。**silly** などは、深刻な内容をもたずに使う場合には **you are silly to do that** などと言うことには問題はないというのが実状である。

Wilkinson (1970) の class W adjectives (W クラス形容詞) には、**bold, brave, foolish, kind, polite, rash, smart, stupid, wise** といった形容詞が含まれる。これらが共通にもつと考えられている特徴は、ここでいう C2 と D3 のパターンをとることとされている。だが、この共通の特徴があるかどうか疑わしい。

結語

以上、叙述的に使われる形容詞を、意味の観点から分類してきた。従来試みられたパターン化は統語的な特徴をもとにしたもので、意味との関連が明確になっていなかった。それを、改めて意味の観点から形容詞を見直したものである。形容詞が叙述的に使われる時には、6つのパターンが用意されており、それぞれの発話者は表現すべき意味を表す形容詞を選択すると、その意味にあった統語形式を自動的に選択するというプロセスをとって発話されているという仮説に基づく分類である。

形容詞についてのパターンの認識はまだ浅く、辞書の記述もこのような観点からもう一度み見直して、記述の充実を図る必要があると思う。ただ、ひとつひとつの形容詞がどのパターンをとりうるかはなかなか決めがたい事が多い。意味の特徴を知るためにどのパターンをとるかを調べると同時に、こういう意味特徴があるのだから、このパターンをとるはずだという観点からの調査が必要である。

注

* 本稿は、JACET (大学英語教育学会) の第1回辞書研究会ワークショップ (1997年12月13日、京都外国語大学) で「形容詞型の表示とその問題点: 形容詞型の研究はなぜ進まないか、また、辞書における形容詞型の表示は可能か」の題で口頭報告した。最終的な原稿にまとめるにあたって、和田四郎、安井泉、名和俊彦、梅咲敦子の4名の方々は原稿を読んで、さまざまな提案、修正案、あらたなデータの提供をいただいたことを記して感謝の辞とする。

コーパスの略称など

- BNC: The British National Corpus.
 BOE: The Bank of English. COBUILD *direct* による5,000万語のコーパス 検索したのは、1997年から1998年前半にかけてである。
 Brown: Brown Corpus.
 LOB: The Lancaster-Oslo/ Bergen Corpus, tagged version.
 LA 1993, 1994, 1995: Los Angeles Times on CD-ROM. 1993, 1994, 1995.
 London-Lund: London-Lund Corpus.
 WT 1989, 1990, 1991: *Washington Times* on CD-ROM. 1989, 1990, 1991.

辞書の略称

- BBI, BBI² *The BBI Combinatory Dictionary of English*. (1986, 1997) John Benjamins.
 CIDE. *Cambridge International Dictionary of English*. (1995) Cambridge Univ. Press.
 COB: *Collins COBUILD English Dictionary*. (1987) Collins.
 COB²: *Collins COBUILD English Dictionary, revised ed.* (1995)
 COD^{8,9}: *The Concise Oxford Dictionary of Current English*, 8th ed. (1990); 9th ed. (1995) Oxford Univ. Press.
 LDCE^{2,3} *Longman Dictionary of Contemporary English*, 2nd ed. (1987), Longman Group UK; 3rd ed. (1995) 桐原書店.
 OALD^{4,5}: *Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English*. (1989, 1996) 開拓社, Oxford Univ. Press.
 OED²: *The Oxford English Dictionary on Historical Principles on CD-ROM*. (1992)
 RHWD: *Random House Webster's Dictionary of American English*. (1997) Random House.

参考文献

- (外国の雑誌名, 定期的に発行される論文集名は一般的な略号に従った)
 荒木一雄・安井 稔(編)1992. 『現代英文法辞典』三省堂.
 Berman, A. 1973. "A constraint on *tough*-movement," *CLS* 9. 34-43.
 Bresnan, J. 1971. "Sentence Stress and syntactic transformation," *Lg* 47: 2. 257-281.
 Burchfield, R. W. 1996. *The New Fowler's Modern English Usage*, 3rd ed. Oxford Univ. Press.
 Chomsky, N. 1964. *Current Issues in Linguistics Theory*. Janua Linguarum, Series Minor, Nr. 38. Mouton.
 Declerck, R. A. 1991. *A Comprehensive Descriptive Grammar of English*. Kaitakusha.
 Halpern, R. N. 1979. *An Investigation of "John is easy to please,"* Ph. D. dissertation, Univ. of Illinois at Urbana-Champaign.
 Herpst, T. 1984. "Adjective complementation: A valency approach to making EFL dictionaries," *Applied Linguistics*. 5: 1. 1-11.
 Hornby, A. S. 1954. *Guide to Patterns and Usage in English*. Oxford Univ. Press.
 Hornby, A. S. 1975. *Guide to Patterns and Usage in English*. 2nd ed. Oxford Univ. Press.
 Jørgensen, E. 1975. "Notes on the group 'for + (pro) noun + to-infinitive'," *English Studies* 56: 2. 129-139.
 柏野健次. 1993. 『意味論からみた語法』研究社出版.
 好田 實. 1986. 「The stone is too heavy for me to lift (*it)」『大阪外大英米研究』14.
 Lasnik, H. and R. Fiengo. 1974. "Complement object deletion," *LI* 5.
 Nanni, D. L. 1978. *The Easy Class of Adjectives in English*. Ph. D. dissertation. MIT.
 Oshima, S. 1987. "Wise-type adjective constructions and the Uniformity Condition," 『高知大学学術研究報告人文科学』36. 11-40.
 Osmond, M. 1997. "The prepositions we use in the construal of emotion: Why do we say fed up with but sick and tired of?" in S. Niemeier & R. Dirven (eds.), *The Language of Emotions*. John Benjamins. 111-133.
 大沼雅彦. 1968. 『性質状態の言い方/比較表現』英語の語法3. 研究社.
 Postal, P. M. 1971. *Cross-over Phenomena*. Holt, Rinehart & Winston.
 Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech, & J. Svartvik. 1972. *A Grammar of Contemporary English*. Longman.
 Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech & J. Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. Longman.

- Sinclair, J., G. Francis, S. Hunston, E. Manning, T. Lane (eds.) 1998. *Collins COBUILD Grammar Patterns 2 : Nouns and Adjectives*. HarperCollins.
- Wilkinson, R. 1970. "Factive complements and action complements," *CLS* 6. 425-444.
- 八木克正. 1987. 『新しい語法研究』山口書店.
- 八木克正. 1990. 『文法活用の日常英語表現』英宝社.
- 八木克正. 1996. 『ネイティブの直観にせまる語法研究—現代英語への記述的アプローチ』研究社出版.
- 安井 泉. 1998. 「蓋然性の語法」小西友七先生傘寿記念論文集編集委員会(編)『現代英語の語法と文法』大修館書店.
- Yasui, I. 1998. "Why is possible impossible in *tough*-construction while *impossible* is possible?" *JABAET* 2 : 57-62.
- 安井 稔. 1996. 『英文法総覧』(改訂版). 開拓社.
- 安井 稔・秋山 怜・中村 捷. 1976. 『形容詞』研究社.

Syntax and Semantics of English Adjectives (2)

ABSTRACT

This is the second half of "the Semantics of English Adjectives and their Patterns," the first half of which appeared in the 82nd issue of this journal.

The purpose of this study is to show the necessity to introduce the concept of the "adjective pattern," like the "verb pattern," for the improvement of English language description. In the first half of this paper, I discussed the concept of the "verb pattern," which was, to my knowledge, first introduced in Hornby (1954), and later revised in Hornby (1975), in which Hornby classified English verbs into 25 patterns according to the types of complementation. Hornby's idea of classifying verbs into types has been put into practice in *ISED*, *ALD*, *OALD*, but the idea of classifying adjectives into patterns has not. Since *ALD* was published, several monolingual dictionaries for learners of English have been published in Britain, all of which have used much energy and space for classifying verbs into types and have given detailed syntactic information to each frequently used verb. English-Japanese dictionaries published in Japan, especially the ones for learners of English, quickly adopted the idea initiated by Hornby and it is now common to see frequently used verbs classified into patterns in those dictionaries. It seems, however, that dictionary editors' attempts to classify adjectives into patterns have not been successful.

In the first half of this paper, after reviewing how English adjectives have been classified in the literature and in dictionaries for learners of English and giving evidence to prove that those classification methods are far from ideal in treating adjectives for various reasons, I proposed to classify predicative adjectives into six major syntactic patterns (namely, (A) it is Adj. that, (B) NP is Adj. that, (C) it is Adj. to do, (D) NP is Adj. to do, (E) NP is Adj. prep, (F) NP is Adj. wh-clause) on the one hand, and to classify them into four major semantic types (namely, *ATTITUDE*, *JUDGMENT*, *DESCRIPTION*, *EMOTION*). Each of these four major types are further subdivided into several subtypes. I also showed, in a broad perspective, how those syntactic patterns and semantic types are related to each other.

In the second half of this paper, I will show in detail how those syntactic patterns and those semantic types are related.

key-words: adjective patterns; semantics of adjectives; adjective classification.